

一人の精神病者を此くの如く虐待しなければならぬ人類は不幸だ。

『もう五六日静かにしてゐたら、縣廳へ届書を出してやると、警部補が言はれたと義母が言ふ。食ふ物を少しばかり余計に持つて來ては、僕をたぶらかすやうな事を義母は言ふのだ。』

父は一度も見舞に來ない。死んだんではないかと僕は聞く。

弟は結婚して何處かで幸福に暮らしてゐはしないか。

易の哲理を僕は獨りで研究したりし初めた。

之も一種の計算狂だ。

亡き黒子

母

春子

嬢

かず子

生む